

海外新聞
三六號

辛未正月十八日



服部文庫
117
88
6



117
88
6



海外新聞三十六號

千八百七十一年第二月六日
刊行
月十七日
横濱
我
去
十
二
日
譯
出
ス

戦争新聞

佛將ジャンシーノ兵二十万人
フレデリッキニ敗ラレタリ
○奥地利國ヨリ和議
ノ見込ヲ以テ諸國ノ會議有ラン
○巴勒府ノ破裂
リ
○巴府ノ破裂
彈攻ハ現今猶盛ナリ故ニ此ノ府中ハ所々ニ火

海外新聞

遷リテ焚燒セシ場所多クリュキセンブールノ花園ニモ破裂彈頻リニ飛散セリ○アアンルイブリ
 ノゼントニユイリノ諸堡ハ既ニ砲設スルニ
 能ハサルニ至レリ然ルニ仏人ノ説ニハ普軍ノ
 破裂彈攻ハ其損害スル所僅カナリ故ニ此諸堡
 ハ容易ニ修復整フ可キ由ヲ云ヘリ
巴勒府ヨリ屢圍ヲ破ランカ為メ突出スルト雖
 モ其志ヲ遂ス又第一月十二日我去十一日
 仏軍ノルマニニ敗走セシハガルドモビール隊ノ軍中

物ニ驚キテ騷キ立シニ依レリトソ此時日軍ハ
 仏兵一万五千人ヲ生擒リ大砲十三門ヲ獲タリ
 當今ベルフォルト府ハ圍ヲ受ケメジールロタロ
 アペロン子等ハ皆日軍ニ降レリ且ロクロアニ
 於テハ大砲七門生擒三百人メジールニ於テハ
 大砲百十六門生擒二百人ナリ○ランクルノ圍
 ミハ解タル由
 普王令ヲ出シテ其軍ヲ擣ヒ且之ヲ戒メテ云ク
 軍士等ノ能事未タ完了セシニアラス望ラクハ

名聲ヲ失ハサル和睦ヲ成ス可キ為メ須ラク猶
勉勵シテ戦フ可シト

オルレアシンスヨリアルテナイノ間ノ農民飢餓
ニ苦シム者皆普ノ兵糧方ニ救養セラレテ居レ
リ

ベハロレン及ヒバポーム府ハ焚燒セラレシ由
ナリ

仏將^{フエ}イドヘルベノ軍ハ普將ホン、ゴエメンノ
為メニ全敗ヲ取リアルラス及ヒツーアイノ方

ニ退ケリ又普將マンチウフェルノ報告ニ其軍第一

月二日我去十一日ニ仏軍ニ攻撃セラレシカトモ
尽ク之ヲ追卻ケタリシト云ヘリ

普將デュールハ仏將ロイノ軍ヲセイシ河ノ左岸
ニ蔽フテ仏兵五百人ヲ生擒シ大砲三門驚旗四
旒ヲ獲タリ

第一月十三日我去十一日仏軍ルーシモントニ於
テ勝利アリシ由ノ風説アリ

普將マンチウフェルハ東方ノ軍ノ元帥ニ任セラレ

タリ

英国内閣ノ大臣 ジョン、ブライトハ 辞職シテチ
ストル、フォルトスキュー之ニ代レリ

仙ノジュール、フールブル此度倫敦ノ諸国会議ニ出
席ス可キ為メニ普ヨリ兵間ヲ通行ス可キヲ免

シテ與ヘシカトモ拒テ之ヲ受サル由ナリ
仙ノガムベッタハポルドーヲ去テシヨアレイニ赴

ケリ

千八百七十一年第二月十一日 我去十二
月廿二日 横

濱刊行ウ井ク、メール新聞ヨリ譯出ス

二十四字許前ヨリ現今當港ニ碇泊セル日国ノ
船数艘ヘルザ号ノ軍艦ニ護送セラレ當港ヲ逃
レ出ントスルノ風説専ラ流布シタリ其實否ヲ
尋ルニヂエプレー号及ヒアルマ号ノ仙ノ軍艦今
朝當港ヲ出帆シタリレハ実説ナレトモ此事ハ
信用スル者無ク又日国ノ帆船数艘好機會ヲ見
テ出帆ス可キ為メニ諸碇泊船ノ外表ニ出テ居
ル由ノ説アルニ因レリ然レ其实际殊ニ疑フ可

クシテ余輩ヲ以テ之ヲ見ルニ若シ日国ノ船艦
一旦局外中立海上ノ界限ヲ出ル時ハ必然ハ
軍艦ノ為メニ奪ル可シ何トナレハハルサ船ハ
鎧装ノアルマ船ニ向ヒ戦フ時ハ一ト支ヘモ為ス
可キ者ニアラザルニ因レリ故ニ若シ如斯ナラ
ハ日国ノ船ハ大概ハ船ノ為メニ奪ハル、ニ非
レハ撃沈ラル可キヲ必セリ此ニ由テ之ヲ推ス
ニ天下豈ニ其本心ヲ失ハサル者ニシテ斯ノ如
キ危険ヲ冒ス者アランヤ

米利堅政府ヨリ此度水師提督ロッヂルスヲシテ
高麗ニ使セシム其趣意ハ高麗ノ沿海ノ測量為
シタキ談判ニ及ハントナリ此ハ高麗ノ海上ニ
テ屢破船ノ患アルヲ以テノ故ニシテ且先頃此
所ニテゼ子ラール、シエルマン号船ノ乗込人ノ死
亡セシ始末ヲ問糺サンガ為メナリト然レトモ
米利堅政府ニテハゼ子ラール、シエルマン号船ノ
破船セシ同時頃ニ其國ノ某号船モ亦破船シテ
高麗人ヨリ仁慈ノ手當ヲ受シ恩アレハ之ヲ謝

セサルヲ得サル可シ

現今支那ノ高官人一名當港ニ到着セリ此ハ支那國當今及ヒ將來ノ諸事件ニ付キ官命ヲ啣テ来リシ者ト見ヘタリ此人ハガンウエイノ奉行ナル由ノ説アレトモ恐ラクハ否ラシ然レモ高官ノ人ト見ヘタリ

天津暴殺一件ノ着落ハ談判ノ次第モ決定ノ為方モ不滿ニ終レリ就テハコウント、ロシユアルトハ其責ヲ免レ難シ蓋シ此ハ僞國公使若シ獨斷ヲ

以テ此處置ヲ為サスレテ其同僚ノ説ニ随ヒ且其處置ヲ天津ニ於テ為サ、リシナラハ甚ダ宜ラ得タルナル可シ左無クシテ此歐洲各國ニ關係アル重大事件ノ此際ニ至リシハ慨歎ニ勝サル所ナリサレトモ今ニ於テ此事ヲ論スルハ已ニ遲シ意フニ僞ト支那トノ條約ノ回復ハ近キニ在リ僞ニテハ支那帝ニ謁見ノ議ヲ言張ルナル可シ支那ハ百方之ヲ抗拒ス可且僞ハ此事ニ就キ一步モ退カスレテ支那ノ外國人ヲ嫉ム黨ハ

甚タ剛強ナルカ故ニ騷擾必ス源ヲ此ニ発ス可
レ故ニ若シ戦争ノ起ルコアラハ亦此^{カド}廉ヨリ生
ス可シ此度支那高官人ノ當港ニ来リシモ疑ラ
クハ蒸氣船ヲ購フ可キ為メニ来リシモノナル
可シ

○
方今普國ノ都伯^イノ大學校中ニ入リシ者ノ中
日本ノ少年三人アリ其二人ハ醫學ヲ學ヒ其一
人ハタイク^ンノ侍醫ノ子ナル由ニシテ專テ法

律學ニ志サセリ此三人ノ者既ニ暫ク伯靈府ニ
居住シテ頗ル獨逸語ヲ學ヒ得タリ

○
近日歐羅巴ヨリノ飛脚船ノ便リニ巴勒府ノ周
圍ニ在ル者ノ中ニ日本ノ學生三人アリ此人ハ
其師ニ從テ此所ニ抑留セラレシ者ナリ巴勒輕
氣毬ノ便リニ依リテ新聞紙ノ端ニ日本文字ノ
短文ヲ書テ倫敦ニ在ル其友生ニ贈レリ其言ニ
云ヘラク願ハクハ一日モ早ク當地ヲ出テタシ

今ハ馬肉狗肉ノ外食ス可キ物ナシト余輩ハ此人等ノ其心ニアラズシテ園内ニ在ルヲ外國ノ人民ニ對シテ其偏頗ノ心ヲ増スニ至ンヲ恐ル且馬肉ハ其本國ニ在リテ食フ所ノ物ヨリ更ニ惡シキ食物ナリ

○
方今歐羅巴ノ戦争益熾ニシテ兩軍漸々ニ各所ニ集合スルニ因リ諸軍舉動ノ巨細ハ電信機ノ傳聞ニテハ渺茫ニシテ其詳ヲ得サル者アリ故

ニ仏軍普軍往來ノ道路及ヒ其陣列セル邨落郡邑等或ハ僻小ニシテ人ノ知ラザルモノ多ク加ルニ電信機ノ傳ル所其地名等誤無キヲ得サルニ因リ聞者皆兩軍ノ舉動位置ヲ委細ニ知ルヲ得難シサレドモ余輩今諸方ヨリノ電信報ヲ集メ子細ニ之ヲ地圖ニ較照シテ其軍陣ノ居所ヲ考定シ以テ看客ニ便ス
仏國北方ニハ仏將フェイトヘルベ軍ヲ指揮シテ普將マンチュールヘル及ヒホンゴエベンノ軍ニ對

海下新聞

シ劇シキ戦ヒ數有リシト見ヘタリ

又倫敦ヨリノ電信報ニ第十二月二十三日我去十一

日ニアミンニ於テ一戦アリ普兵ハ仏軍ヲ敗リ

テソシム河畔ノ卒地ヲ越ヘ一千人ヲ生擒セシ

由ニシテ且仏軍ハソシム河畔ノ平地ヨリ北東

ノ方ニ退キシト見ヘタリ其故ハ第一月二日我去

十一月三日我同十三日ニアルラストバポームトノ

間ニテ一戦アリシ由倫敦ヨリノ報告アルニ因

レリ此戦ハ仏人ハ仏兵勝チシト云ヒ普人ハ普

軍勝シト云フ孰レカ是ナルヲ知ラスト雖トモ

佛兵ハ巴勒ノ方ニ進ムヲ得スレテ更ニ北ノ方

ニ退キレテ明カナリ又第一月七日我去十一日倫

敦ヨリノ電信報ニ右イトヘルベハリールニ退

キ其軍ハ方向ヲ變シテアルラマヨリヅーアイ

ノ方ニ出張セリト云ヘリ若シ佛軍巴ムヲ得

スリールニ退キレナラハ普軍ハセダンニ於テ

佛軍ヲ降セシ如キ勝利ヲ得ンテ難カラザル可

ク且右イイトヘルベノ軍ハ大ニ普軍ヲ惱マセシ

者ナレハ其兵必ズ寡少ニアラサル可レ若シ此
兵全ク降伏スル時ハ仏軍ノ勢ハ愈々衰フルニ至
ル可レ

巴勒府前ノ形勢ハ北地ニ於ケルヨリハ更ニ特
ニ難シ第十二月廿七日我去十一日明日ハ巴勒ノ
破裂彈攻始マラント待設ケ居タリレカ廿八日
同七ニ普兵仏ノロスニイ及ヒアブロンノ兩堡
ヲ攻メ却テ佛兵ノ為ニ退返サレ死傷多カリレ
トナリ然レ此時仏ノ死傷モ亦頗ル多ク翌日ニ

ハアブロン堡ヲ棄テ、引退キ即時ニ普軍代
乗リ入りシト又ノゼント及ヒノアレイノ兩堡
モ皆發砲スルヲ能ハサルニ至リ第一月六日我
十一月ニハ巴勒ノ南方及ヒ北東ノ諸堡逐次ニ
破裂彈ノ攻撃ヲ受タリト云フサレトモ仏人ノ
説ニハ此砲撃損害スル所些少ニシテ容易ニ修
理スルヲ得可シト云ヘリ又第一月七日我
七月ニハ更ニ復ニ堡ヲ撃スクメシト云フ報告
アリテ同九日同月十日ニハハルキセニブルノ花

園ニ破裂彈多ク逆落タル由ナリ又クラマツト
堡普軍ノ手ニ入テ本府ノ方ニ其砲口ヲ向ケシ
ト云フ説アリ仏人ノ説ニハ數度日軍ヲ退卻ケ
タレトモ不幸ニシテ毎ニ勝利ヲ得ントスル際
其軍ノ退卻ヲ以テ終ル由ヲ云ヘリ
西方ニテハ普ノ王族フレデリックキナルレス數軍
功アリ第一月十日我姑十一ノ電信報ニ其軍巴
勒ノ南西ノ要害ノ府城ナルルマニニ進ミ既ニ
南ノ方ヲキルトルヨリ北ノ方ノゼンクニ至ル

迄ノ戦線ヲ據有セリト云フ又第一月十三日我
十一月倫敦ヨリノ電信報ニ王族フレデリック
廿三日仏將シャンジノ軍二十万ト戦ヒシガ仏
ノガルドモビール隊ノ物ニ驚キ騒キ立シニ依
リ遂ニ其軍ヲ敗テ一万五千人ヲ生擒シ大砲十
三門ヲ獲テルマンノ府城ヲ略セリト云フ
東方ニテハ日軍ベルフォルトニ於テ退却セラレ
タリト云フ説アリ又ベサンソン府ハ日軍ニ乘
取ラレタト云フ説アリ仏將ガリバルヂ及ビ

ブールバキハ第一月九日我去十一日
 二日將ウエル
 デルノ軍ノ方ニ進ミ来リシガ普軍チ
 ジョンヲ引
 拂ヒシニ因リ仏軍代テ乘リ入り其
 ヲリ普軍ハ
 ウエスールニ退キ此處ニテ援兵ノ
 来ルヲ待テリ
 又此地ヨリ北ノ方ノ
 ジール府ヲ降リシニ因リ
 日軍大砲百十六門生擒二百人ヲ
 獲テ其他此處
 ニ在ル食料器材日軍ノ有トナリシ
 物甚多ト
 云ヘリ
 右ノ諸説ヲ以テ考ルニ此兩三週
 日間ノ戦ハ

凡テ普軍ニ利アリテ仏軍ニ利アラ
 ガレテ論
 待タズシテ加フルニ巴勒府内ニハ
 食料甚ダ乏
 シク最早一兩週日ヲ支エ難シトノ
 説アレバ若
 此莫確信ニシテ且現今已ニ破裂
 彈攻始マリシ
 ナレバ縱令巴勒人勇ヲ振テ防禦ヲ
 為ストモ其
 破ルヤ必セリ余輩ヲ以テ見ル時ハ
 巴勒降伏
 ノ期恐ラクハ一兩週日ノ間ニアル
 可シ

同上新聞外篇ヨリ譯出ス
 リユ
 テル氏電信機ノ報告

第一月十七日 我去十一日 倫敦ヨリ普將ウエルデル

ウヰルリールセキセル府ヲ乗取リテ仏兵六百人

ヲ生擒セシ由ヲ自ラ電信ヲ以テ報セリト○此

戦仏人ノ方ニテハ仏軍勝利ヲ得タリト云ヘリ

又ウヰントームノ西方ノ仏軍ハ千百人ヲ生擒セ

ラレテ退陣シタリト云ヘリ

第一月十一日 我去十一日 ボルドーヨリ巴勒ヨリ

第一月十日 同 廿 輕氣球ノ新聞ニ云フ破裂弾攻

弥劇シクナリ此夜ハ数千ノ破裂弾巴勒府内ニ

落チパンゼオンソルボン子シント、ジブリ、ス

及ヒ處々ノ家屋ニ落来レリサレトモ府人ハ皆

決死シテ敵ヲ禦キ其志感スルニ餘リアリト

同月十二日 我去十一日 倫敦ヨリ昨日メクレンブ

ルク侯ルマンノ北ニ於テ仏兵一万ヲ生擒シ今

日ハ侯自ラ兵ヲ率テルマンニ進メリトナリ

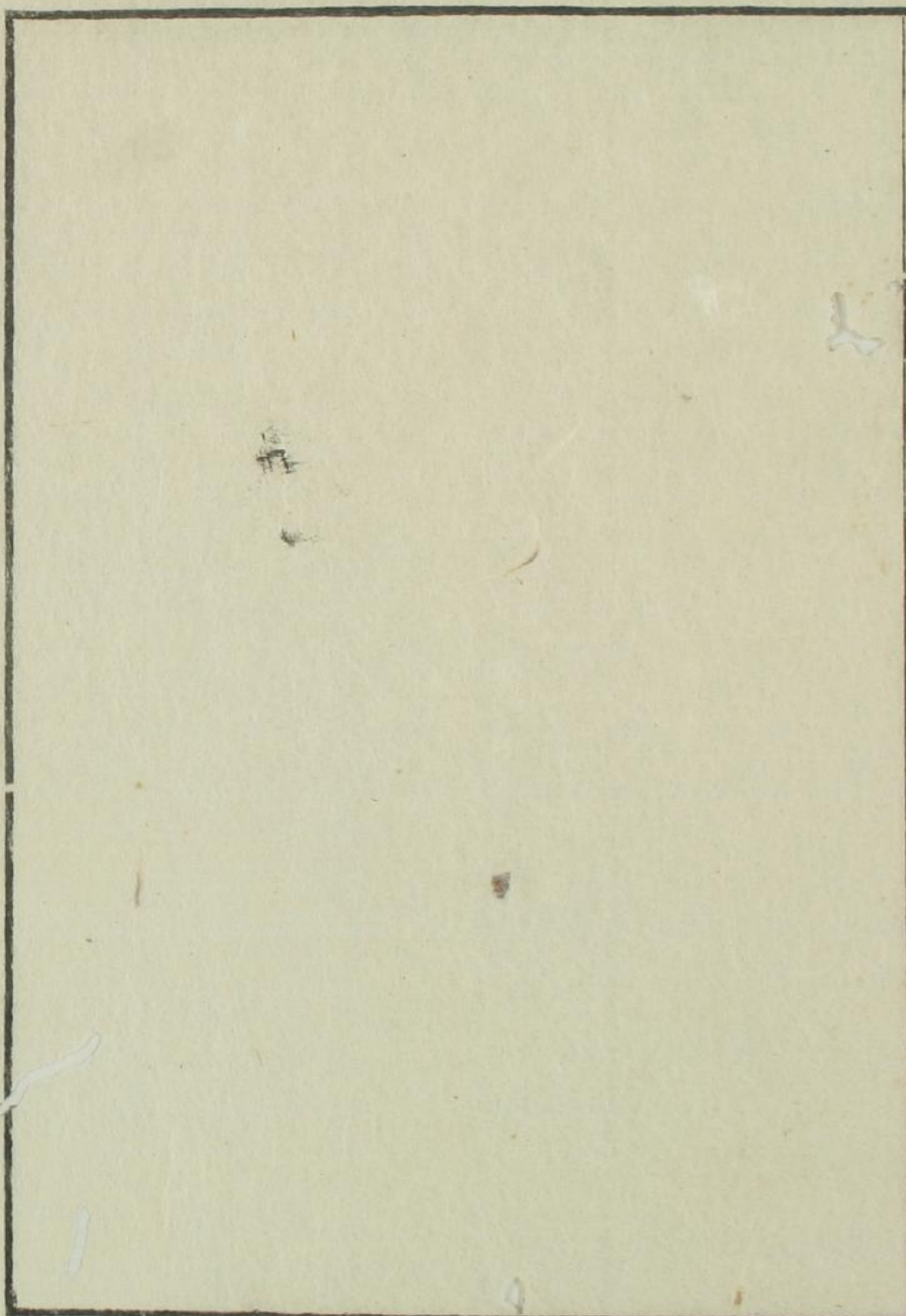
巴勒府ノ破裂弾攻ハ猶劇シク續ケリ

同日倫敦ヨリ仏將シヤンシーノ報告ニ昨日ルマ

ンニ於テ敵ヒシニ敵其摠陣ヲ撃シカ一陣破レ

シノミニニシテ其他ハ皆堅固ニ之ヲ拒ケリ今日
 モ亦攻撃有ラント待設ケ居ル由ヲ云ヘリ
 巴勒ヨリ十一日ノ報告ニ仏國政府ノ諸人ヨリ
 連名ニテ普軍ノ方ニ言送リシ辭ニ當府ヲ破裂
 彈攻ニ為スニハ預シメ其旨ヲ告示シ府中ノ婦
 女孩提ヲ外ニ出サシメシ後發砲ヲ為ス可キニ
 左無クシテ不意ニ此所為ニ及ヒシヲ責タリト
 同月廿二日我去十二日倫敦ヨリ北方ノ仏軍ハケ
 シンチンニ於テ敗績セリ日軍ハツール府ニ入リ

ロシクウ井一府ハ焚燒セリ



千八百七十一年第二月二十日 我止月 横濱

刊行エコトダニヤツホシ新聞ヨリ抄譯ス

左ニ記スル所ハ此度米ノ飛脚船到着ニ付香港

ヨリ届キタル傳信機報告ノ新聞ナリ但シ此新

聞ハ未タ十分確實ナルモノトス可カラス

第一月三十日 我十二 新嘉坡ニ達スル所ノ

ルウトル氏傳信線ノ報告

第一月二十七日 我十二 新聞佛外國事務執政

ジユールフル昨日巴勒ニ歸来リ本日普王ノ

在ルウエルサイルニ至リテ巴勒府降参ノ談判
ヲ為スコシトノ官報アリ○昨日夜半以来砲戦
ヲ停メタリ

第一月二十八日我十日倫敦ヨリタイムス新聞

ニ曰クジュールファーブル昨日ウエルサイルニ至

リ暫時休戦ノ條約ヲ結ヒ早速其旨ヲ佛全國ニ

公告スコシ○巴勒ニテハ人心大ニ動揺ス

巴勒周圍ノ堡砦ハ尽ク普ニ引渡シ三週間休戦

スルノ條約ヲ結ヒタリ○巴勒府内ノ兵ハ其府

内ニ在リテ生擒トナリタルモノト見為シ置ク
可シ

第一月二十九日我十二日倫敦ヨリ休戦ノ條約ト

巴勒降参トノ二事ニ付當時談判最中ナリ

海外新聞三十六號終

海外新聞三十七号

千八百七十一年第二月二十七日 我正月九日 横

濱刊行エコー ジュジャポソ新聞附録

傳信機報告

第一月二十八日 我去十二日 紐育ヨリ昨日巴勒降

參セリ其降參ノ條約ハ城中ノ兵士ヲ引渡ス

及ヒ民會ヲ會聚スルニシテ其他ハ詳細ノ事

ヲ知ラス

第一月二十九日 我去十二日 ウエルサイルヨリ巴

勅府明渡ノ談判大ニ拂取リ本日中ニハ多分降
叅ノ條約書ノ調印ヲ為ス可シ

第一月二十八日我去十二日倫敦ヨリ本日刊行ノ

タイムス新聞ニ巴勒降叅ニ付テノ風評ハ相齟
齟シテ分明ナルヲナシ唯降叅ノ談判退々拂取

ル可キ模様トナリタリト云ヘル新聞ノミハ確
説ナリ

巴勒ヨリノ報告ニ城兵ハ府内ヲ出テ猶西三度
程ハ戦フヲアル可シト云フ○巴勒ハ敢ニ降ル

トヲ欲セサレ氏饑餓ニ及フ者数千人ナルニ因
リ已ムトヲ得スシテ降叅ヲ為スニ至ル可キカ
故其府内ノ騒乱ヲ防止スルニハ極メテ手強キ
震置ヲ為サ、ルトヲ得ス

仏將エデルブルバジュンケルクニ在リテ其城ヲ守
ルノ用意ヲ為セリ

仏兵ラロシ近傍ノ橋ヲ毀テ敵兵許多ヲ生擒シ
タリ

普ノ砲兵騎兵二千人ニテルマンスヲ攻取レリ

仏將ブルバキ普將フエルデルノ兵ヲ罷ヒ其
受ケタル所ノ損傷一万人余ナリト云フ

仏兵大ニ困難シ其兵中ノ傷者ヲ捨置キテ退キ
タリ

普將マシテウフルノ兵仏將ガウルバツキノ兵
ノセイカシタルウエレーモラシヤールト往来

スル道路ヲ遮キリタリ
第一月廿七日我去十二ウエルサイルヨリ已勒降

衆ノ條約ニ日耳曼兵府外ノ堡砦ヲ有スルヲ

定ム可シト雖モ府内ハ之ヲ有スルヲナカル可

ク又那破倫帝ノ太子皇帝ノ位ニ即キ母后其攝
政トナル可シト云フ

普兵仏將ジャンセイヲ退掛ケル為メ直チニ進發
ス可シ

第一月廿五日我去十二ウエルサイルヨリビスマ
ルヨリ仏國ニ和議ヲ許ス條約ノ箇條ハ左ノ

如シ第一ノルサース州トロルレインノ中日耳
曼ロルレイント称スル地方トヲ割キ渡ス可キ

夏第ニ拾万々フランクノ償金ヲ出ス可キ夏第
三四十艘ノ兵艦ヲ渡ス可キ夏第四仙蘭西藩屬
地中ノ一所^レ何^レ地タルヲ割キ渡ス可キ夏
其償金ハ仙蘭西全國ノ都府村邑ニテ其調達ヲ
為ス^レヲ請合フ可シ若シ其請合ヲ為ス^レヲ肯
セサレハ豪家ノ財産ヲ奪ヒ強テ其請合ヲ為ス
ニ至ラレム可シ
巴勒ノ景状實ニ恐ル可ク種々ノ党与兵器ヲ弄
シ二十万ノ兵ヲ以テ府内ヲ出テ決戦セント求

メタルニ其將ウイノワ無益ニ其人命ヲ損スル
^レヲ肯セサルニ因リ強テ其職ヲ廢セラレゼ子
ラールフロ^レ之ニ代レリ
過激ノ徒新タニ政府ヲ建設セント欲シ民兵ノ
内二百十人程其政府ノ官負トナル可キノ選擇
ヲ受ケタリ
普兵本日ブリセリイトブウルセ^レトノ間ニ新
タニ砲臺三ヶ所ヲ造リ設ゲタリ
ベルホルハ廿九日前ニ降参ス可キノ新聞ア

リ

第一月廿九日

我去十二
月九日

倫敦ヨリウエル
サイルヨ

リノ報告ニ日ノ薩克素
尼亞兵第十二番隊ハ本

日十字ニロマンウ
イルノアシーノ
ジャン等ノ所

々ヲ取り日ノ巴維里
亞兵ハシヤラント
ンモン

ルウジュワンブルヲ
取り普ノシレ
ジヤ州ノ兵ハ

イブリートビセイ
トルヲ取りタリ

巴勒ヨリニ万
万フランクノ
償金ヲ拂フ可シ

ウエルサイルヨ
リノ官報ノ文ヲ
本日伯灵府ノ
寺

ニテ讀上ケタリ

第一月廿九日

我去十二
月九日

倫敦ヨリ日耳
曼帝ウイ

ルレムヨリ其后
ヲイギスタニ
左ノ報告ヲ為シ

タリ其辞ニ昨夜
仏ト三週間ノ
休戦條約書ニ調

印ヲ為シ巴勒
府内ノ兵卒及
ヒモビル隊ハ生

擒ノ取扱ヲ以
テ其府内ニ留
メ置キガルドナシ

ヲナール隊ニハ
其府内ノ取締
ヲ為サシメ又府

内ノ堡砦ハ皆
余カ所有トナ
リ巴勒ハ是迄ノ如

ク余カ兵ヲ以
テ圍ムト雖
モ兵器ヲ引渡シ次第

其府内ニ食料ヲ持運フコトヲ許ス可ク且十五日
内ニボルドーニテ仏ノ大民會ヲ召集シテ會議
ヲ為サシム可シ又巴勒ノ外ニ在ル仏ノ兵隊ハ
其休戦ノ間方今屯集スル地ニ其儘留在セシメ
我兵ト仏兵トノ間ノ地ハ彼我ニ属セサル地ト
為シ置ク可シ○此ノ如ク我兵ノ勝ヲ獲タルハ
實ニ兵士ノ命ヲ惜マス奮戦シテ報國ノ心厚キ
ニ因リ且又上帝眷顧ノ恩ニ於テ之ヲ謝セサル
可カラス冀クハ速ニ太平ノ期ノ至テ生民ノ福

ヲ享ケンコト余カ希望スル所ナリ

千八百七十一年第二月二十七日 我正月九日 横

濱刊行シヤパンヘラルト新聞ヨリ譯出ス

第一月二十九日 我十二日 倫敦ヨリ佛帝ノ一門ヲ
位ニ後シ皇后トロシューフーブルノ三人ヲ攝政
トシテ佛ノ國憲ヲ定メントノ説盛ニ起レリ
普帝ハ巴勒府ニ入ラス普軍ノ指揮ヲクロウン

フリンスニ委託シテ火曜日 我十二月 十一日 ニハ伯

ニ歸ラントス

巴勒ニ食料等ヲ運輸スルニヂエツプノ道ヨリ送
レリ

巴勒ノ降伏及ヒ休戦ハ政治ノ事ニ就テハ何事
モ未タ一定セス且戦争ノ終ル可キハ必シモ證
スルニ足ラス萬事ハ聚會ノ上ニテ定ルナル可
シ○倫敦ニ在ル仏人等今夜大ニ騒キ立シカ未
タ静マラス

同日伯灵ヨリ本府ニテハ巴勒降伏ノ報告ヲ聞
テ現今人民大ニ喜ヒ一府皆狂スルカ如シ
ビスマルクヨリノ書状到来ニヨリ昨夜遅ク傳
ヘ来リシ巴勒降伏ノ新聞愈虚ナラサルヲ徴セ
リ因テ今日ハ早曉ヨリ處々ノ礼拜堂ニテ鐘ヲ
鳴ラシ拜礼ヲ行ヒ參詣スル者夥シク天下太平
ノ説法アリ又朝礼拜ノ前後ニ太平ノ祈禱礼拜
アリ
タイムス新聞テ嘗テ出版セシ中ニビスマルク

トボナバルチスト党ト竊ニ謀リテ^{ナホレオシ}那破崙党ノ
 田復ヲ企ツル由ヲ載タリシガ此事ハ虚説ナル
 一ヲ更ニ辨解ス可キ旨ヲチセルヒユルスト氏ヨ
 リ求メシ事ヲ載セタリ
 第一月三十日 我去十二 ボルドーヨリ^{シヤンシイ}
 ノ本營ハラバルニ在リ○第十五番隊第十六番
 隊第十九番隊第二十五番隊ハウ井ルソンブール
 ジ子ウェールヲ據有セリ○ブールバキハ第十八
 番隊第二十番隊第二十四番隊ヲ擁シテルーラ

ンド及ヒパラルドニ據レリ○ガリバルヂハヂ
 ジョンニ在テ三万ノ兵ヲ有セリ○フェイデルブハ
 第二十二番隊第二十三番隊ヲ有シテアルラス
 ドールカンブライニ屯セリ○ソアセルハ三万
 ノ軍兵ヲ以テハイブルノ前面ニ在リ○新兵教
 導ノ陣所ニハ五万ノ兵有リ○千八百七十一年
 ノ賦役ノ兵丁三十万ノ数アリ○休戦ノ期限終
 ルニ及ハ、フハイブル氏ハ九十万ノ軍兵ヲ以テ
 復ヒ戦争ヲ始ントスルノ勢アリ

同日倫敦ヨリバーデンノ宰相等ハノ官報ニ云
フ仏將ブルバキノ軍ハブルントリユー近邊ニテ
國境ヲ越エ瑞士國ニ入りタリト
第一月二十九日我去十二日ウエルサイルヨリ普兵
及ヒ其工兵昨夜ブハンリアンノ堡砦ニ入レリ此
ハ地雷火ヲ掘出サンカ為ナリ○諸堡砦へ急ニ
大炮ヲ運ヒ備ヘタリ此ハ巴勒ノ周廓ニ猶炮銃
ヲ備ヘ且府人輕躁ナレハ總テノ兵器ヲ打棄ル
迄ハ不虞ノ變有ラントヲ懼ル、カ故ナリ

堡砦修築ノ工兵ヲ守護スル為ニ歩兵砲兵ノ大
軍ヲ前進セシメタリ其主意ハ將來更ニ血ヲ流
スノ慘無カラシメ且ポルドーニ於テ諸議員聚
會ニ依テ和戦ノ兩事ヲ決定スルノ便宜ヲ得セ
シメンカ為ナリ仏國ノ各部ニ議員選舉ノヲヲ
許シ議員ハ國中ヲ自由ニ通行シテ苦シカラサ
ルノ旨ナリ
巴勒ノ軍勢マリオン隊及ヒモビール隊等ハ總
テ擒虜ヲ以テ所置ス可シ但シ其内一万二千人

ハ巴勒府中取締トシテ其儘タル可シ
仏ノフランククチリウル隊ハ総テ解散セシム可
シ但シナシヨナールガルド護國兵ハ兵器ヲ持シテ
其儘タル可シ

佛軍ハ其兵器旗旆野戦砲ヲ十四日内ニハ普軍
ニ引渡スナル可シ

佛兵ハ兵器ヲ持シテ巴勒府内ニ退クヲ得諸
堡砦ノ大砲ハ敵ニ引渡し周廓ノ大砲ハ之ヲ卸
シテ其砲車ヲハ普軍ニ渡し大砲ハ遺シ置ク可

キナリ

府廓ト堡砦トノ間ニ區分ノ線ヲ畫シ仏ノ方ノ
部分ハ周廓ヲ限ト為シ普ノ方ノ部分ハ周廓ヨ
リ五百歩ノ外ヲ限ト為セリ

ウ井ンセン子ノ堡砦ハ地理ノ便宜ニ依テ仏ノ方
ノ手ニ残レリ

兵勢ヲ以テ考ルニ巴勒ハ猶全ク田内ニ在ル者
ナリサレトモ通路ノ地三十里ヲ修復シテ府民
ノ日々食料ヲ供給運輸スルヲハ之ヲ許セシナ

ル可シ

グーレルバキノ軍及ヒベルフォルトノ砦ハ休戦ノ
約ヲ奉セサル者トス

南方ノ仏軍ト普軍トノ區分ノ線ハロアル河ヲ
以テ其限トスル者ナリ

和睦談判ノ最近ノ報告ニ因ルニビスマルクノ

趣意ハ和議決定ノ條約トシテ仏ヨリ兩州按ス

アルセース及ヒニ地并ニ殖民地一ヶ所軍艦二十

艘償金四十億フランクヲ受取ンコトヲ望ミクリ

ト見エタリ

巴勒ノ降伏ハ唯戦陣上ノ事ニシテ總テノ政事

向ノ談判トハ全ク別事トシテ見做ス可シ

仏ノ外務執政フーブルハ自カラ巴勒ノ軍兵ヲ

將ヒ些ノ汚辱ヲ受クルコトナク府中ヲ退去シテ

仏國ノ内普軍ノ據有セサル地ニ陣シ約定ノ期

月間敵對ヲ為サス居ル可キ旨ノ許可ヲ得ンコ

ト普軍ニ請ヒ且日軍巴勒ニ進入スルニ勝利ノ

礼ヲ以テスル無ランコトヲ求メタリト云フ

サレトモ此條約ハ普ノ軍議官等不承知ニテフハ
 一ブル氏ニ答ヘ云フ降伏ノ主意ハ唯先頃セダ
 ン及ヒメツツニ於テセシ如ク同様タル可シト
 第一月三十日我去十二月十日ボルドーヨリ仏國諸都
 府ニテハ此度ノ休戦及ヒ地ヲ割クノ議ヲ肯ン
 ゼサル者多クシテ猶敵對ノ色ヲ保チ此主意ヲ
 以テボルドーニ使者ヲ贈レリ
 第一月三十一日我去十二月十一日倫敦ヨリ仏軍復ビロ
 アル河ノ南ニ進来ルニ依テ普軍ブローアールニ在

ル橋ヲ毀テリ是ニ依テ仏軍進行ヲ止メ南方ニ
 退ケリ
 同日ルマンヨリ王族フレデリックチャルレス仏將
 シヤンジイニ使ヲ贈リ仏普休戦ノ約定リシヨヲ
 告ケ且シヤンシイハ此約ヲ奉スルヤ否ヲ問ヘリ
 同日倫敦ヨリフアイブルトビスマルクトノ會議
 條約ヲ實踐スルノ所置昨日終日施行セラレタ
 リ
 普人ハ巴勒住民ノ食料ノ為ニ家畜ヲ府内ニ贈

レリ

ビスマルク英國外務局へ告テ云フ方今巴勒へ
食料等ヲ贈ルニ唯ヂエツプノ街道ノミヲ通行ス
可シ且供給充足スルニ至ル迄ハ普軍府人ト共
ニ其給資ヲ分チ受ク可シト

倫敦ト巴勒トノ間ノ通信ノ路復ヒ開ケタリ

ガムミッタ氏ハ自殺セシ由ノ風説アリ

エコーヂユイルド新聞ニ巴勒ニテ某將自殺セシ

ト云フサレトモ其名ヲ載セス

千八百七十一年第三月六日 我正月十六日 横濱刊
行エコー、ジユ、シヤツボン新聞ヨリ抄譯

リエウトル氏傳信機ノ報告

弟二月一日 我去十二日 倫敦ヨリ佛ノガムベツタヨ
リ休戦ヲ拒ム旨ヲ廻文ニ記シテ謂ヘルニハ休
戦ヲ為サントスルハ全ク仏ノ兵卒ノ勇氣ヲ折
ントスルヲナレバ如何程ニモ奮發シテ戦ノ用
意ヲ為シ決シテ国家ノ耻トナル可キ和議ヲ為
ス可ラスト

同日倫敦ヨリビスマルクヨリ和議ヲ許ス條約
ノ箇條ハ十万フランクノ償金ヲ出シアルセ
スロルレインノ二州トツツベルホルノ二城
及ヒ印度ニアル仏ノ屬地ボンヂセリイトヲ渡
シ且兵船二十艘ヲ渡スナリ
第二月七日我去十二日倫敦ヨリロルレイン及ヒ
ボンヂセリイノ二地ト兵船二十艘トヲ渡ス可
シトノ説ハ甚疑ハシ○休戦ノ間ト雖モ仏ノ東
方ニ於テハ猶引續キテ戦ヲ為ス可シ○ガムベ

タハ其職ヲ退キタリ
第二月九日我去十二日倫敦ヨリ英國女王ヨリノ
告諭ニ仏普双方互ニ相讓ルノ意ナケレバ戦ノ
再ヒ起ル可キ模様ナルニ我國ハ常ニ中立ノ法
ヲ守リ休戦ヨリ終ニ確定ノ條約ヲ結フニ至ル
トヲ希望シ又此度魯トノ難事ヲ片附シカ為ノ
會議ニ仏ノ公使出席ナキハ歎スル所ナル旨ヲ
述ヘ且英國ノ兵制ヲ一変ス可キヲモ述ヘタ
リ

第二月十一日 我去十二月二十二日 倫敦ヨリホルドーヨリ
ノ報告ニ此度仏ニテ會聚ス可キ大會議ニハ和
議ヲ欲スル党ノ出席スル者多カル可ク戦ヲ去
サントスル党ハ漸々ニ其勢ヲ失ヘリ○巴勒府
内ハ大ニ難儀セル由ナリ

海外新聞三十七号畢

海外新聞三十八号

千八百七十一年第一月七日 我去十一月十七日 紐育
出板ウヰークリイヘラルド新聞ヨリ抄譯ス

西班牙王アマデウスノ事

此度推撰セラレテ西班牙ノ王位ニ登ル可キ以
太利ノ王子アマデウスハ西班牙ノ内カルタゼ
ナノ港へ到着シ夫ヨリ最モ威儀ヲ表スル行装
ニテ當月第二日 我去十一月十二日 當ル月曜日ニ其都
府馬德里ニ到着シ行装ノ俣ニテ先第一ニ同国

將軍プリイムガ後室ノ許ニ問ヒ將軍カ最後ノ悔ミヲ速ヘラレタリ元來此人ハ西国ノ干城タル可キ名将タリシカ過シ頃非命ノ死ヲ遂ルヲ以テ国中有志ノ輩ハ大ニ失望ナリ王子ニハ早クモ之ヲ弔ヒ至情ノ厚キヲ表セシヨリ大ニ人望ヲ得其躬ノ位ヲ固フスルノ基トナルベシト

次ニアマデウスハ國會ニ出席シテ公ケノ誓約ヲ取レリ其後ロサスソリイラリゴロオロサガ

等ノ如キ其国ノ名臣ニ面會ニ及ヒ俱ニ西国中興ニ適宜ノ制度ヲ編成センヲ談合セリ當時府内ノ者共ハ王子ノ夾着ヲ得タルヨリ各ノ喜悅大方ナラザレバ百事ノ進歩ヲ期ス可シトナリ

是ヨリ先ニ千八百七十年第十月十七日我
馬德里ニ於テ王子アラスタ公アマデウス
ルジナンドマリイヲバ西班牙王ノ尊稱ヲ以テ
国王ニ撰ムノ會議アリテ其国風ヲ以テ即位ノ

禮式及ヒ向後支配ス可キ国制ノ体裁等ヲ逐一ニ表セリ此時議負ノ内ニ王子ノ即位ヲ可トスル者百九十一人不可トスル者百二十人ナリシカカルリイストツ西国ドオン、カルロス党ハ別段可否ノ沙汰無クシテ無名ノ投票十二ヲ投セシツミナリ故ニ同日直チニ公然ト新王ノ即位ヲ國中ニ布告シ夫ヨリ凡ソ二週日ノ間ニ議負ノ中ニテ一人王子ヲ西国王ニ撰ミシ事ヲ其父以太利王ハ許ニ奏聞セントテフロレンスニ向テ

進發セシカ第十二月四日我去国十月十二日二同国ノ王ヒクトルエマニユセル并ヒニ王子アヲスタ公兩人ニテ其使節ヲピイテイ、パレースト称スル王宮ノ中ニ招待セリ其時王ニ向テ使節其口上ヲ奏シケレハ国王ヨリ答ヘニ余カ愚息ヲ以テ西人ノ忠義ノ心ニ詫トナリ故ニ以王ヨリシテセルランノプリムエスパルテロゾリイラ等ノ如キ西国ノ名臣等ニ以国臣下ノ尊爵オルデルヲフ、アンノンジャードト云ヘル称号ヲ賜ヘリ

毎ト行月

是ハ此者等西国ニ在リテ王室ノ再興ニ尽カシ
タル其功勞ヲ賞シタルナリ
往ノ諸報告ニ依レハ西国ノ新王アマヂウスニ
ハ少年ノ血氣ニ任カシテ發スルヲ多クシテ同
国ノ事務ヲ取扱フニモ実着ナラザリシトナリ
アマヂウス西国ノ使節ノ前ニテ曰ヘラク予ハ
只爾後平穩安寧ノ道ヲ履テ苟モ邪路ニ赴カサ
ランヲ要スルノミ今爾等予ヲシテ四隅ヲ駕馭
スル万乗ノ職ヲ寄託セントスルヲ實ニ其任ニ

堪ヘサルヲ知レリ故ニ予固ヨリ撰擧ノ重キヲ
思ヒ只示教ヲ受ケ其国ノ旧例古格等ニ循フ可
キ信義ヲ存スルノミ○予カ方今ノ身今ハ軍勢
ノ中ニ在ラハ僅ニ一兵卒タルニ過キス又朝廷
ニ在リテハ其国住民中ノ第一等ニ居ル可キナ
リ○予西国ニ君タルノ後国ノ為メニ予鮮血
ヲ流スル有リヤ又是迄西国ノ名譽ヲ天下ニ示
シタル其国名臣等ノ榮耀ヲ益スル有リヤ未
ダ知ル可カラスト雖モ予カ許ス所以ノ者ハ唯

西国ノ人民已レ等ノ撰ミタル国王ノ事ヲ評シ
テ必ス王カ誠忠ナル国家ノ為メニ諸党ノ争ヒ
ヲ倒スニ足りテ一致安寧ヲ志スノ外他事無キ
由ヲ言フベキナリト

西国ノ使節ハ初メヨリアマデウスノ正話ヲバ聞
キ居タリシガ大ニ感シテ新王万歳ト賞賛セリ
以国ニ於テハ西国ノ使節ヲ十分ニ饗應シ且西
国ニ赴カントシタル新王ニモ其用意頗リナリ
又馬德里ニテハ去年クリストマスデー
第十二月廿五日

日ノヨリ王子ノ来着ヲ今ヤ遅シト待受ケタリ
シカ其發足初メノ見込ミヨリハ延引ニ及ヘリ
是全ク他ノ故ニ非ス現今西国一時動搖ノ事ア
ルニ依レリ

アマデウス一世ハ初メサオイ家ニ在リテ人望
ヲ得タル者ニシテ以王ヒイクトルエマニユエ
ルノ次男ニシテ第三子ナリ去ル千八百六十七
年第五月三十日我慶應三年四月廿七日ニ王族ナヤルレス
エンマンニエトレステルナノ内室ニテメロ

ドノ女侯ルイザ、カローリン、ギスレイナル者
ノ公主マリイ、ビクイトル、カルロソト、ヘンリイ
ダ、ゼエント云ヘル者ト婚姻ノ約ヲ取り結ヘリ
僭王子ハ千八百四十五年第五月三十日夕誕生
ナルヲ以テ推ス時ハ當今其年齢二十六歳ニ十
レリ且王子ニハ以国陸軍ノリウテナントゼ子
ラル海軍ノリイルアドミラル騎兵ノフリガ
一隊ノ總督ヲ務メタリ
シイステルナノ公主トアマギウストノ縁組固

ヨリ公ケニ出ルト雖モ又其縁組ニ就キ二人ノ
間一ツノ情話アリ公主ニハ才智アリテ諸藝
ニ達シ且自在ニ他国ノ語音ニモ通シ實ニ拔群
ノ女子ナリシガ年二十歳ノ頃アマギウスニ對
面セシ時王子ニハ二十二歳ノ少年ナレバ公主
ノ可憐ナル容貌ト礼儀アル様子トヲ見テ大ニ
ニ愛慕ノ情ヲ起シ又公主ニモ是ヨリ先ニ王子
以国ノ獨立ヲ支ヘントテ奧地利亞人ト戦ヒ持
援ノ勇氣ヲ顯シ且ツレジメント隊ヲ率ヒ真先

ニ進ミ騎兵ノ急撃ヲ物トモセス奮戦シテ受ケ
タル手麻等ヲ像想シ昔シニ聞及ヘル騎將ノ有
様ヲハ今眼前ニ見シ如ク思ヒシトソ
以國政廳ノ中ニテパロソリカソリイナル者第
一ニ此縁組ヲ拒ミ王子ハ未タ當年二十二歳ニ
在シ其兄ヒドモソド侯ハシベルトニモ今ニ於
テ婚姻ノ沙汰無キ故甚ク不理ナル由ヲ言ヒ張
レリ然ルニ宮女并ニ騎士等ハ種々ニ言ヲ設ケ
少年ノ艶情黙止難モトトテ助ケテ此縁組ヲ成就

セシメンソヲ父王ニモ之ヲ公ケニセリ故ニ父
王ヨリ改メテ婚姻ノ許可アリタルニ由テ各万
歳ヲ称シ美儀ヲ盡シ立派ニ取り飾リテ婚姻ノ
式ヲズ行ヒケル是ヨリ先ニ右婚姻ニ付キ内々
ノ邪魔ヲハレシ者有リシカドモ今ハ其情意達
スルヲ得テ位儼空シカラサリシ
或人ノ説ニ公主ハ婦人ニ似ハサル猛キ性質ナ
リトテコンテスライカセリイノ著述シタル冊
子ノ中ニ種々ノ事ヲ述ヘテ誇リタルヨリ一時

歐洲貴家中ニハ彼是ノ沙汰アリシカドモ王子
一家ノ内ハ平穩ニシテ毫モ疑フ可キヲ無カリ
イトソ
公主ハ殊更ニ婚姻ノ際ニ臨ミテ平穩ニ過シ難
キヲモ王子ノ如ク高尚ノ風有ルヲ以テ強ヒテ
之ヲ除キタルナル可シ
矣ニ又王子カ人ト為リ及ヒ行事ヲ語ンニハ第
一ニ寛大ニシテ博愛ヲ志シ專ラ報國ヲ任シ且
騎兵ノ突撃ニ長シタルノ譽レ高キアラスタノ

ブリガード隊ノ中ニテ唯一人ノ軍將ト仰カレ
初陣ノ頃ヨリ戰場ニ臨ミシ毎ニ競馬ノ技ニテ
ハ古人ニ劣ラヌ美觀ヲ顯ハシ又敵兵急ニ襲ヒ
来リ味方之レカ為メニ敗走セントシタル時衆
ニ先立チ心靜ニ危險ヲ犯シタルト等ニ依テ衆
庶ノ愛望ヲ受ケタリ
又王子ハ戰場ニ在ル時ノ衆ニ異ナルニ非
スシテ平常ノ所行モ又同様ニシテ常ニ堪忍決
断ノ所置ヲ要スルナレバ多ク友人等ノ倚頼ヲ

受ケリ

王子ハ年来ノ事務ニ接シテ其膽ヲ練リ且ツ往
ニ第一ニ自家サライ家ヲバ起シヒドモンド及
ヒサルシニヤニ於テ尊キ由緒アル者ト仰レ次
ニ當今ニ至リ又總以太利ヲシテ英仏等ノ如ク
世界第一等ニ位スル国ト為シ報國ノ功ヲ奏シ
タル苦心ヲ以テ今又西國ノ宝位ニ昇リタルヲ
推スニ既往ヲ以テ其将来ヲ察スルニ足レリ是
王子カ後ニ所行ノ頼ミ多クハ畧説セシ如ク全

ク其履歷西國踐祚ノ前ニ至レル迄久シク次ヲ
逐フテ人ト為リノ進ミタルナリ
爰ニ西國ノ景況ヲ言シニ元來西國ハ豊饒ノ地
ナレハ常ニ傲徒跋扈シテ一揆ノ戦争ヲ企ツル
者絶エサリシガ国民ノ智略ニ依リ大ニ之ヲ破
却シ速カニ曩時ノ如ク西國ヲシテ各国集會ノ
席ニ加ハラシムルヲ得ルニ至レリ
過シ五十ヶ年ノ間西國ノ事情ニテハ頻ニ治安
ヲ妨クルト共多カリケレド方今王子踐祚ノ決

議ヲハ西国人民永久維持シテ正月ノ吉辰ニ初
メテ国政ヲ執リタル西班牙国王アマデウス一
世ノ大志ヲ遂ケサスルニ於テハ余等同心ナル
西国人民ノ幸ヒノミナラス實ニ天下一般ノ利
益ト謂フ可シ

柴根ノ新聞紙ニ左件ヲ記セリ

凍涼

安南府名

ヨリ来着シタル船ニテ左ノ新聞ヲ

得タリ支那北方諸省ノ激徒頻リニ安南領地内
ニ侵入シ安南兵ノ將帥之ヲ防カント為シタレ
トモ遂ニ其意ヲ得スシテ自殺シタリ又高貴ノ
官吏ニ負其將帥ヲ助ケサルノ罪ニテ其国裁判
所ニ呼出サレタリ

支那廣西ノ副王ヨリ其激徒安南ノ地ニ侵入ス
ルヲ止メンガ為メニ兵ヲ送りタルカ其兵過半

激徒ニ與シタル由ナリ但シ此新聞ハ我輩其事
情ヲ詳知セサル国ヨリ得タル者ナレハ未タ十
分ニ信據シ難シ

歐羅巴方今形勢ノ歌 ジャッパンヘラルド新
聞ヨリ抄訳ス

魯西亞ハ饜欲 土耳其ハ悻怖

奧地利ハ沈吟 以太利ハ悅樂

比蘭ハ戰栗 暹国ハ痿痺

西国ハ枯死

普魯士ハ雄飛

英吉利ハ高擧

海外新聞三十八号畢

海外新聞三十九號

千八百七十年十二月三十一日 我去十一
月十日 紐

育刊行每週新聞ヨリ抄譯ス

モンセニノ洞開ニヨリテ亞力百山ノ
アルプス

大鑿路出来セシ事

去ル土曜日モンセニノ洞開愈落成セリソハ
余カ同社ノ今朝出板セル新報ノ中以太利ノ
サヨリノ電機新報ノ條下ニ掲ケタレト尚又茲
ニ記載シテ普ク世ノ看客ニ知ラシム

海外新聞

三十九

一

抑亞力百ノ山ト云ルハ其脈以太利スイス仏蘭西フランス瑞士
奧地利ニ亘リ其頂ニハ四時積雪絶エス實ニ歐
洲第一ノ大山ナリ然レトモ斯ク諸国ニ跨リ夕
レハ人民ノ交通貿易等ヲ妨クルコト亦少カラス
然ルヲ今般其鑿開ノ成就セルハ唯此事ニ関カ
レル理道師工人等カ喜悦ノミナラス最モ世ノ
為メニ祝スヘシサレハ余カ輩今年ヲ目レテ化
工ノ妙ヲ奪ヒ復築ノ功ヲ奏スルノ年ト云ヘル
モ亦當ラズト謂フ可カラス

在昔ハンニボトルカ此山ヲ越テ兵ヲ進ムル時
岩石ヲ溶解スル藥ヲ用ヒテ其險路ヲ開カント
欲シ過ル處醋ヲ課求セシコト有リト言ヒ傳ヘタ
リ其事ノ虚實ハ姑ク舍キテ當時ノ形勢ヲ追想
スルニ此山脉ハ歐洲各国ト交通スルノ一大障
壁ナレトモ亦弱国強隣ノ侵犯ヲ防クカ為メニ
ハ實ニ巍然タル天造ノ險ナリレト見エタリ然
ルニ汽力ヲ以テ舟楫ヲ行リ線銃ヲ以テ隊伍ヲ
備フルノ事起リテヨリ以来水ニハ裝鉄ノ軍艦

有リテ能ク敵陣ノ横面ヲ襲ヒ陸ニハ圭状ノ彈
 丸有テ能ク敵船ノ鉄甲ヲ破ルヲ以テ此山ノ險
 ナルモ復負ムヘカラサルニ至レリ是ニ於テカ
 各國ノ道路ヲ理ムルニ巧ナル者相續テ之ヲ開
 通スルノ法方ヲ講究シテ数千ノ型圖ヲ造リテ
 未タ施サ、リシ然ルニ僂帝那破崙第一世ノ時
 ニ當リ不世出ノ智畧ヲ以テ畢世ノ間盛大ノ結
 構多カリシカ初テ此山ニ連レル聖ゴサル聖
 ヘルナルド及ヒシンプロン等ノ羊腸九曲ノ險

路ヲ開テ平夷ノ大道ヲ作レリ是今ニ歐洲各國
 ノ稱揚スル所ナリ自來世ハ日ニ開化ニ進ミ人
 ハ益々工思ヲ競ヒ事務ノ係累随テ繁多トナリ唯
 海ノ汽船ノミニ非ス陸ニモ亦輻路ノ設アリテ
 能ク超海縮地ノ術ヲ行フ是ヲ以テ從來週日ヲ
 課セシ事業モ僅ニ分抄ニテヲ以テ其成功ヲ期スヘ
 キニ至レリ
 儲又今般此鑿道ヲ開通セントセシ始ヲ原ルニ
 壘地利ニ於テ通商貿易ノ為メト其以太利ニ在

ル領地ヲ兵カヲ以テ服役セシメントスルニ似
ノ已ニカヲ合スルヲ待タスシテロムバルヂーニ
通スル平易ノ捷徑ヲ開カントス此由以太利ニ
聞ヘシカハ其政府ノ驚愕一方ナラス且當時又
專ラ獨立国タラントノ用意アリ加之ニ其國中
ノ商賈ハ新タニ商貨ヲ輸出スルノ路ヲ開カン
トヲ類リニ願フナリ是ニ於テカ王チャールズ、
アルベルトハ已ニ千八百四十二年ノ頃ヨリ亞
力百ニ鑿道ヲ開キテ仏ト相通セントヲ企テタ

リ是實ニ盛大至難ノ事業ナレドモ當時此山ノ
上下輻道蜘蛛ノ網ヲ拭ケタル如ク條通交達セ
ルヲモテ見レハ是ヨリ十年前ノ世ノ形勢ニ比
スレハ強チニ浮タル望トハ謂フベカラス且其
宰相カウレル氏ナル者能ク王ノ志ヲ扶ケテ共
ニ此業ヲ起サントシ加フルニ其國運漸ク挽回
セル折ニシテ又北諸國ノ名ヲ求ムル政律學
士利ヲ計レル富豪商賈等カ助ニヨリテ遂ニ此
大事業ヲ實地ニ行ハントスルノ企ニ及ヘルナ

リ斯クテ三人ノ才能兼備ハレル理道師ニ委任
 シ預メ之ヲ開通スルノ法方ヲ講究セシム三人
 ノ者日夜怠慢無ク相共ニ勉勵討論シ幾多ノ試
 験ヲ經テ遂ニ仙國ノ方ニ於テハサウオイニ在ル
 フルク河ノ上流ナルフルノート云ヘル細溪
 ヲ擇ンテ開通ノ處トシ以太利ノ方ニ於テハド
 ラーノピードモンテース溪ノ上流バルト子
 シヲ開通ノ處ト定メタリ此兩處間仙ニ於テ西
 イセール河ノ流ニ臨ミ以ニ於テ東ポー河ニ向ヒテ

鑿開スヘキ岩石ノ最モ狹キ所ヲ測ルニ英尺七
 里五九三ニアリ偕其鑿開ヲ叙メタル項千八百五十八
 年ハ從來土工ノ用ヒ來レル挑鑿耒耜木捍籠畚
 ノ如キ素樸ノ器具ノミヲ用ヒシカ千八百六十
 一年六月十二日ニ至リテ以太利ノ方ニ在ルバ
 ルト子ーシノ鑿道ニ於テ初メテ鑿開ノ機器ヲ
 試用シ中間一年ヲ隔テ千八百六十三年一月ニ
 十五日ニ至リテフルノールノサウオイニ於テ此
 器機ヲ實地ニ用テ鑿開ヲ叙メタリ其間此機器

ヲ造構シ或ハ之ヲ改造シ又之ガ為ニ用フル人
夫牛馬等ヲ訓練シ其外諸入用ノ品物ヲ資給ス
ルカ為ニ多クノ日ヲ消セリトソ
再說千八百六十二年』政府ニ於テハ定式ノ會
議アリ以テ扶ケテ此大事業ヲ成サント欲シ若
シ以ノ理道師等二十五年ニシテ其業ヲ終ント
ナラハ其費用ノ半量即六千五百万フランクヲ
年々賠補シテ出スヘシト約定セリ然ルニ年々
賠補ノ事ハ以ニテ欲セサレハ此約成ラサラン

トヤレガ然ルニテモ千八百六十三年六月三十
日ヨリ十年ノ間ニ此工作落成セントナラハ』
ニテ其費用ノ半量三千五百七万五千フラン
クヲ出スベシト約セシカハ此約決決定シ是ヨ
リ理道師等益々勉強シテ即チ去ル土曜日先一
且鑿開ノ業ヲ終ヘタリ来七月一日ニ至レハ道
路全ク修理シ轍路モ通スルニ至ルヘシ右約定
ノ日限ヨリハ早キ一二年半餘ナリ實ニ勉メタ
リト謂フヘシ

六レ一世ヲ蓋フノ大事業モ後世紙上ニ載スル所
 ヲモテ看レハ左マテニ難事トハ覺エスシテ徒
 ニ看過スルモノ多ケレト其時ニ當リ其事ニ處
 スレハ一些事ト雖モ亦容易ニ其志ヲ遂ク可キ
 ニ非ス今モンセニ一ノ鑿開モ亦之ト同シク其
 路一タヒ通シ車馬絡繹タル周道ト成ル後ハ人
 唯其功業ノ大ナルヲ稱スルノミニテ誰カ當日
 艱辛ノ情境ヲ談スル者アラニヤ是最モ遺憾ノ
 事ト謂フヘシ然レト逐一其事ヲ臚載セハ此一

冊ノ新報ヲ填ルモ尚盡セリトスヘカラス故ニ
 聊カ茲ニ大略ヲ述フルノミ
 其始此山ヲ鑿開セント企テシ時固陋ノ理學者
 等ハ之ヲ鑿開スヘキノ理無キヲ説キ又奸巫賣
 僧等ハ或ハ此山中ニハ伏流地火不測ノ流沙等
 アリテ之ヲ穿テハ必ス其害ヲ被フルト言ヒ或
 ハ堅氷積雪等俄ニ融解シテ人皆壓死セラル可
 シト言ヒ或ハ土油燃氣等火ヲ引キテ俄ニ爆裂
 ス可シト言ヒ或ハ此中ニハ金屬ノ堅塊アルヲ

モテ山神之ヲ取ラル、ヲ慳ミテ之ヲ鑿開スル
時ハ岩石頭上ヨリ崩壓スヘシナト種々ノ説ヲ
唱ヘテ理道師工人等ヲ恐嚇スルヲ以テ工人等
ハ殊ニ深ク危疑シテ僧徒ト伴ナハル、ニ非レハ
洞中ニ入ルヲ欲セサリキ此外尚種々ノ障罣ア
リテ大業屢中絶セントセシカ理道師等愈撓ミ
無ク日夜工人等ヲ罵励マシ蒸氣ノ響ハ恰モ百
千ノ雷ノ如ク頻リニ洞門ヲ掘穿チシカハ山神
モ此勢ニヤ辟易シケン何ノ崇リモ無クシテエ

人等カ疑懼モ漸ク止ミ遂ニ鑿開ヲ為遂ケタリ
シトナリ
備以太利ニテハ理道師等ニ右ノ如ク種々ノ障
罣紛起セル間ニ更ニ志ヲ屈セサルト又其國人
ノ懷濶ニシテ金錢ヲ各マサルトニヨリテ遂ニ
此大事業ヲ落成シタリケレハ國中ニ産スル所
ノ麵粉雜貨其他ノ土宜モ從來ニ比スレハ其輸
出倍蓰シテ國人先第一ニ其利ヲ占ム可シ唯國
人ノ利ヲ占ムルノミナラスシテ歐洲各國ノ人

亦其利潤ヲ被ルヘシ唯歐洲各國ノ人ノミナラ
ス全世界ノ人亦皆無量ノ利澤ヲ被ルト謂フヘシ
其故ハ先ツ歐洲北部ノ人ハ容易ク南部ニ通行
スルヲ得此間ニ轍路ヲ設クレハ日耳曼海ト波
羅的海ノ諸港口ノ運漕ヲ地中海黑海等ニ直ニ
通スルノ便利アリ又オリオンタール驛船ノ新
路ウイアブリンヂシモ來千八百七十一年ノ中
ニハ必ス通スヘシ蓋シ南北相分レ歐洲南
北ヲ指東西
東西兩半球ヲ云相隔ルト雖凡終ニ皆此地ニ來リテ互

ニ握手スベク是ヨリ各國ノ交際貿易モ益盛大
ニ赴クヘク人蹟ノ多ク至ラサル窮髮蛮野ノ地
ニモ自ラ德化ヲ及ボスヘシ然レハ此大鑿道ノ
功業ハ蘇士地峽ノ開通亞國ノ長轍道海中傳信
機ト並稱スヘキ者ニシテ實ニ是以國人民ノ報
國ノ誠衷ト其才能トニ因ルト雖凡抑亦天世界
ノ人民ヲノ親ク相和好セシメンカ為メニ斯ク
為サレムル所ト謂フヘキカ

千八百七十一年三月十三日横濱刊行
ツパン、ヘラルド新聞ヨリ抄譯ス

普仙戦争電機信

二月一日我去十二日倫敦ヨリ巴勒府中ニ立籠レ
ル仙ノ當座ノ飢渴ヲ凌カシメシカ為メニ普
軍ヨリ三百万人ニ給スル程ノ糧食ヲ贈レリ○
ポインタルリー傍近ノ二村ノ砦柵大将マンテウ
ヘルカ率ユル所ノ前鋒衛兵ノ為メニ攻破ラル
○仙將ヂュクロー事ノ敗レヲ見テ藥ヲ仰テ死セ

シト云フ風説アリ○糧食ノ運漕ヲ便スルカ為
メニ曩ニ破壊セル轍道橋梁等ヲ復築セリ○合
衆国ニ會議アリフェニアン党ノ英ヨリ逐ハレタ
ル者愛耳蘭人ノ天主教ヲ奉シヲ国ニ入ルノ事
ヲ議セシニ之ヲ是トスル者百七十二人之ヲ非
トスル者二十一人ナリシカハ衆説ニ從テ遂ニ
其投化ヲ許スノ議ニ決セリ

同日倫敦ヨリ仏將ブールバッキガ率ユル所ノ兵
八万人今日瑞士ニ入ル○ガムベツタ氏各部ノ

鎮臺ニ從來ノ畫策ヲ變セスシテカノ盡ルマテ
戦ハン1ヲ布令セリ

同月三日我去十二月十四日同處ヨリ本日仏国ニテハ會

議アリタレドモ其決議ニナリタル事情ハ未タ
世ニ知ラレス○ガムベツタ氏巴勒政府ノ因循ナ
ルヲ愠リ再ビ書ヲ送リテ若シ今ノ如ク因循シ
テ事ヲ決セスンハ我代ツテ国政ヲ執ラント云
ヘリ○ビスマルクトフリーブル氏トノ商議ニヨ
リテ休戦日限ノ間八日耳曼ノ兵巴勒ニ入ル

能ハスト○コトテ、ドルヅ、ブ及ヒ、ジュラノ
諸州ニ於テハ前ノ如ク戦ヲ休メス又巴勒ノ周
郭ニ備ヘタル銃砲類皆之ヲ取除ケリ
同月六日我去十二倫敦ヨリホルドウト巴勒ノ
国會議員ノ説合ハサルヲ以テ恐クハホルドウ
ノ會議ハ成ルヘカラス○ガムベッタ氏ノ論フア
ブル氏ノ為メニ説破セラレタリ此事ノ結末恐
クハ大ナル混乱ヲ生スヘシ又休戦ノ期限延期
ニ及フヘク議員ノ撰挙モ亦延引ニ及フベシ○

仏ノ諸州ヨリ出セル首事ノ名代人等ガムベッタ
氏ヲ留ムルカ為メニ今方ニホルドウニ行ケリ
同月七日我去十二倫敦ヨリ女王ノボッフオロメ
ヂュサ及ヒワロラス名号船ヲ巴勒ニ送ランガ為
メニウーリツチニ於テ糧食二千噸ト乾麵ヲ焼ク
カ為メニ局炉二十七ヲ積込ミタリ○ガムベッタ
氏ハ巴勒ノ政府ニテ其先帝ノ親戚及ヒ其頃職
ニ在リシ執政元老鎮臺及ヒ其他ノ士官等ヲ議
院ニ出席セシメサラントノ説ヲ破リシヲモテ

毎卜新聞
三十九

職ヲ辞セリ

同日同處ヨリ「ポルドウ」ニ居ル西「埃」以ノ使節等皆巴「勒」ノ政府ノ説ニ従フヘキ由ヲ同意シ若シ尚兩府相和セズンハ我等皆本府ヲ去ラント云ヘル由○「ポルドウ」巴「勒」兩府ノ異論未タ一決セス○巴「勒」政府ヨリガムベッタ氏カ唱フル所ノ説ニ嚴シキ回答ヲ為シタリ

同月十三日我去十二日同處ヨリ巴「勒」府中ノ人皆オ「ル」レ「ア」ン「家」ヲ慕フ○休戦日限延期ニナリタ

リ是ハ議負ノ人撰未タ終ラサレハナリ○倫敦

其他英ノ海岸ニ守衛ヲ置クノ説アリ此風説疑ハシ

同月十五日我去十一日同處ヨリ休戦ノ時限尚一

週日間猶預ニナリタリ○「ベル」フォルトノ人民弥

休戦ノ事ニ同意シ且立王黨ノ人ノ衆議ニヨリ

テ和ヲ議セントス○巴「勒」ハ穩ニシテ糧食充実

セリ

海外新聞三十九号 畢

海外新聞四十号

千八百七十一年第三月十八日 我正月廿八日横濱

刊行ヘラルド新聞ヨリ譯出ス

第二月十四日 我去ル十二月二十五日 倫敦ヨリ黒海條約ノ

吏ニ就テ往復ノ書翰公布レタリ

イリオット氏ノ見タル新聞紙ノ中ニ嚮ノ巴勒條

約ノ日ヨリ三年ノ後ハ諸國ノ名ヲ署セシ者英

國ヲ除クノ外皆此條約ノ主意タル黒海ノ一件

ヲ拋棄スルノ意ヲ顯ハセシヲ證セリ

諸國ノ會議ハ木曜日去十二月十六日我ニ於テ集
會シタリ去十二月廿七日

仏ノ國會ハ日曜日去十二月十二日我ニボルド

ニ於テ聚會セリ此時議員三十名出席アリ

英國ノロース氏米利堅國ヘアラバマ号船ノ事

件及ビ漁獵一件ノ取極ノ使節ノ任ヲ辞セリ依

テスタップフォルドノルスコート氏此任ヲ受ケタリ

第二月十五日去十二月廿六日倫敦ヨリ仏ノ國會再度

ノ聚會ニテ此迄ノ防禦政府其政權ヲ遜レリ廿

レドモ新政府ノ立ツニ至ル迄ハ其權ヲ有セリ
又選擇セラレタル議員ノ三分二ハ君主政ノ党
ニシテジュールスフル氏ハ推選セラレ巴勒府ノ議
員トナレリ

仏將ガリバルヂハ將帥ノ全權ヲ解ケリ

第二月十六日去十二月廿七日倫敦ヨリ火曜日去十二月廿

五日ノ國會ニテ四百五十人ノ議員到着シタルヲ

ヲ報告シ且プリンストンジョアンウナルヲ推選スル

ノ議ハ見合セニナレリ此會議官ノ長ハ蓋シチ

ール氏ニシテ國會ノ長官ハグレウ井一氏ナル可
 シ又ポリンスナポレオンハ推選セラレテコル
 シカノ議員トナレリ
 第二月十七日 我去十二日 倫敦ヨリ英國公會ノ下
 院ニ於テカルドヌル氏軍制ノ議ヲ呈シテ曰ク
 買入法ヲ弼メテ職任ニアル士官ニ其報償ヲ附
 与シ且其職任ヲ授ルニハ必ズ人ヲシテ互ニ相
 競較セシメテ其試験ニ依リ選舉ノ權ハ大總督
 ノ手裏ニ在ル可ク又大總督ハ戰務局ニ於テ騎

衛ノ雜務官ノ補翼ヲ受クベシ義勇兵ハ更ニ精
 嚴ニ編制ス可ク且更ニ其隊ヲ大ヒニ為スヲ
 勉ムベシ又常備兵民兵義勇兵ハ之ヲ合シテ四
 十三万一千人ノ數ニ至ラレハ可レト
 日帝海軍ハ命ヲ下シテ嘗テセイン河邊ノ人
 民ニ課シタル二千五百万ノ上納金ノ三分ノ二
 ヲ減セシメタリ又仏國ノ海軍及千八百七十
 一年ノ賦役兵此度召集セラレシニ因リ休戦ノ
 期限ハ唯五日間ヲ延ヘタリ

第二月十八日我去十二日月廿九日倫敦ヨリ仙國東部ニ休
戰ノ約ヲ許セリチール氏ハ行政官ノ總裁ヲ命
セラレタリ

英國下院ニ於テグラストトーン氏ノ曰ラク日
耳曼仙蘭西兩國ノ自カラ和睦ノ約束ヲ取結ア
トハ其妨トナルトナカル可ク且余ノ意フニハ
兩國ニテ他國ノ其事ニ預ルヲ欲セサルニ似シ
リト雖モ余カ願フ所ハ此和議ノ約條寬優ニノ
嚴刺ナラサルニアリト又曰ク若レ和議ナラス

シテ再ビ戦争ニ及バ、其結末ハ必ス見ルニ忍
ヒサル酷虐ノ約條ニ終ラントテ恐ル故ニ若シ
和議整ハザル時ハ英國之カ為ニ其周旋ヲ為シ
テ可ナル可シト

第二月廿日我正月チール氏諸宰相ノ職ヲ定メ
タリ

タイムス新聞ニ云フ諸國會議ニテ外國ノ軍艦
黒海ニ入ルヲ許スノ議決定シ且土耳其政府ニ
ダルダ子ルスへ魯西亞及ローマニヤノ船ヲ除

クノ外各國ノ船ヲ入ル、ヲ容ルス可キヲ命
 シタリ魯國ハ此條約ヲ許諾シタレドモ土國ハ
 猶豫シテ未タ決セス
 仏普和議ノ條約若シ仏國ニテ許可セザル時ハ
 忽チ復タ戦争始マル可シ又和睦ノ約條ハアル
 サースノ地及ビロルレーンチオンウヰールベル
 フォールノ一部分ト七十万々フランクノ償金ヲ
 普ニ与フルニアリ
 二十二日我正月和議ノ整フ可キハ必然ナル可
 四日

シト見ヘ各國ニテハ大概仏國ノ政府ヲ認メタ
 リ又仏ノトロシュー氏ハ普軍ノ巴勒府ヲ有スル
 ノ議ヲ非トセリ○西班牙ノ女王ハ病危篤ニシ
 テ殆ント死ニ至ラントス
 休戦ノ約再ビ二日ノ日延ニナリタリ且領地讓
 リ渡レノ一議ハ仏國ノ為メ便宜ナル條約ニ決
 シタルカ故ニ和議ハ必然整フ可シ但シ償金ノ
 一議ハ未ダ一決セサルノ由ナリ
 第二月廿三日我正月國ヨリ援兵ヲ出ス可キ
 五日

由ノ令アリシカ其事止ミタリ日兵ハ多分日曜
 日我正月ニ平穩ニ巴勒府へ入ルナル可シ又魯
 國ニテハ仙ノ政府ヲ認メタリ
 第二月二十六日我正月和議ノ條約ハ左ノ如シ
 アルサース及ヒモツハ普ニ渡レテベルネール
 ハ仙ニ返シ且償金ハ五十万フランクナリ又
 日軍八月曜日我正月ニ巴勒府ニ入ルナル可シ
 同月廿七日我正月和議ノ反條約ハ調印ノ了
 リ休戦ノ約ハ第三月十二日我正月迄日延ニナ

リタリ又償金ハ三年間ニ拂フ可キニ定マリ其
 間ハ日國ニテ堡砦領地ヲ預カリ置リ可キトニ
 決セリ○ローマニヤ公ハ其位ヲ禪レリ
 普軍三十万人明朝巴勒府内ニ入り條約許諾ノ
 時迄ハ其地ニ留マルナル可シ
 チール氏ノ定メシ宰相ノ職左ノ如シ
 裁廳吏務宰相 チェフォール氏
 外國吏務宰相 ジュールスーブル氏
 内國吏務宰相 ピカルド氏

學校吏務宰相
レモン氏

貿易吏務宰相
ラブレクト氏

陸軍吏務宰相
フロー氏

海軍吏務宰相
パチュアン氏

造営吏務宰相
ラルレー氏

會計吏務宰相ハ未ダ其人定ラズ

歐洲傳信線報告

第三月一日 我正月十一日 倫敦ヨリ昨日日耳曼兵巴勒

ニ入ラントセシニ付キ其府内ノ人心大ニ動揺

シタリ○仏政府ニテハ預メ巴勒府内ニテ日耳

曼兵ト市民ト戦鬪スルノ患ヲ防クノ備ヲ為シ

タリ

日兵ノ巴勒ニ入ルモノ幾ニ三萬人ニ過キザル

ベシ○仏ヨリ日ニ償金拂方ノ皆濟トナル迄ハ

日兵シヤムパーン州ニ屯集シ居ル可シ

仙ノ大會議昨日聚會シタリ其時チエール氏ハ
此度ノ和議假條約ヲ諸議員ニ示セリ蓋シ其假
條約ハ嘗テ傳信線ヲ以テ報告シタル處ト異ナ
ルヲナキ由ナリ
第三月二日我正月倫敦ヨリ仙ノ大會議ニテ和
議假條約決定ノ事ヲ議セシニ之ヲ可トスル者
ノ數五百四十六人否トスル者ノ數百七人ナリ
○昨日巴勒ニテ大ニ動搖セシ事アリシニ因リ
シヤンゼリゼイ街ニ通スル道路ハ皆番兵ヲ備

ヘ往来ヲ禁シタリ市中ノ有様極メテ憐ム可シ
○日耳曼兵第十字ニ巴勒府内ニ入レリ○府内
ノ為替座及戲場ハ皆戸ヲ閉シ新聞紙ハ皆出板
ヲ止メタリ○夜ニ至リ府中静謐ナリ
第三月三日我正月倫敦ヨリ仙ヨリ日ニ拂フ可
キ償金ハ三度ニ渡ス可シ但シ十萬々フランク
ハ本年中ニ渡シ二十萬々フランクハ明年渡シ
又二十萬々フランクト利足トハ明後年渡ス可
シ

貿易條約ノ事ニ付テハ未ダビスマルクトチエ
ールト談判シタルナシ

日兵本日巴勒ヲ引拂ヘリ

昨日ポルドーニテ和議假條約ヲ調印シタリ

同日倫敦ヨリ昨日ウルサイルニテ和議條約取

極ノ書面ヲ取替シタリ

ジユールファーブルハ日兵直ニ巴勒ヲ引拂フ可キ

トヲ言張リタリ○ビスマルクヨリ仏ノ守衛兵

惣督ウノワニ書ヲ送り日兵巴勒ヲ引拂フ時ノ

諸件ヲ相談シタリ○巴勒ハ静謐ナリ

第三月五日我正月十五日倫敦ヨリ日兵昨日無事ニ巴

勒ヲ引拂フタリ○巴勒府内ニテ用党起リ議論

紛々タリト雖モ未タ現ニ騷擾セシ事ナシ

八日ノ内ニ日兵ウルサイルヲ引拂ヒ日帝伯林

ニ帰ル可シ

日兵巴勒ト塞内河辺ノ砲台トヲ引拂フタリ

瑞西ヅーリクニテ日耳曼人仏ト和儀ノ整ヒシ

トヲ祝ヒシ時仏ニ左袒セル党之ヲ怒リ騷擾ラ

起シタリ之ニ因リ瑞西政府ヨリ直チニ兵士ヲ
出シ銃ヲ發スルヲ数个ニシテ之ヲ鎮ムルヲ
得タリ

新嘉坡ヨリ香港ニ至ル迄ノ海底傳信線ノ器具
ヲ載セタル蒸氣船ベルジエン名号既ニ倫敦ヲ
出帆シ蘇士ノ堀割ヲ通りテ印度ノ方ニ至ル可
シ又カンダロ及ヒマインヤ名号ノ蒸氣船二艘
不日ニ倫敦ヲ出帆シテ印度ニ至ル可シ○其傳
信線ハ彼五月初旬ニハ成功ニ至ル可シ蓋シ其

頃ニハ他ノ會社ニテ香港ヨリ上海迄ノ海底傳
信線成功ニ至ル可キニ因リ終ニ倫敦ヨリ上海
迄傳信線相連接スルニ至ル可シ○交趾ノ柴棍
ヨリ香港ニ至ル迄陸路ヲ通行ス可キ往還ヲ造
ラントスルヲハ仏ノ形勢平定セサルニ因リ未
ダ決定セズ

第三月九日 我正月モルニングポースト新聞ニ
曰ク魯西亞ト普魯士ト密カニ條約ヲ結ヒ若シ
向後仏ヨリ波蘭往時獨立國ナリシガ魯普澳ヲ
ホラトノ為ニ亡サレタリ

擾セントスルアラハ魯ヨリ澳ヲ劫カス勢ヲ
示シ自カラ普ヲ助ケントス可ク若シ歐洲各国
仏ヲ助クルアラバ魯ハ力ヲ尽クシテ普ヲ助
ク可シ

第三月十四日我正月廿四日昨日黒海一條ニ付テノ會
議終レリ○歐洲各国黒海ヲ中立ノ區ト為シタ
ルヲ廢スル條約ニ調印シタリ但シ仏モ其中
ニ加ハレリ

海外新聞四十號畢

御用御書物所

東京本町四丁目

紀伊國屋兵衛

藏版

